Kaare Ström (1902-1967)

ノルウエーの陸水学者 Kaare Strøm 教授は、1967年2月28日病死した。日本ではあまり知られていなかったが、この半世紀の間ノルウエーの陸水学を背負って立っていた人である。筆者は初学のころ、ノルウエー湖沼の藻類を研究している学者として、彼の名を知っていた。論文を交換するようになってから、1932年に“Tyrifjord. A limnological study”を受取ったときの感銘を今に忘れない。この論文(84ページ)で、彼は当時まだ学界で考えが熟していなかった生物の生産に注目し、生産(production)と生産力(productivity)に定義を与え、それらを十分に論議していたからである。Strøm はノルウエー湖沼を次々と研究したが、そのもっとも著しいのは深層に停滞水をもった深いフィヨルドと、北部ノルウエーの亜寒帯湖であろう。前者を彼は“land-locked waters”という語をもって表現したが、これは現今の部分循環(meromictic)湖沼の研究に先鞭をつけたものである。同時に氷期地殻平衡時に捉えられた、地質学的古代の海水に由来するとの説を立てた。

Strøm は藻類の研究から湖沼の研究に踏み込んで行った。湖中の生産力を知るために、湖盆形態および湖沼地質を同時に詳細にしらべたのが、彼の研究の大きい特徴である。また、それらと関連して、深水層の一定単位当りの溶存酸素減少量を、生産力測定を目安として導入した。そして、一方に地球化学をより所とし、他方に陸水学を根拠として、地球科学の中に、“Geophysiography”なる分野を総合樹立しようと試みた(1962)。彼の陸水学が中道から地理学的色彩の濃いことを感ぜしめたのは、このような意図と興味とがあったからである。また、彼には地形学の論文がいくつかあるのも、その表われである。陸水の研究は、地球物理学、地球化学、地形学、生態学等の総合でなければならぬというのが、彼の主張である。

Strøm は18歳のときに既に淡水藻類の小論文を発表しているが、その長逝の前年1966年までに、世に送った学術的著作は140篇に及んでいる。筆者が読んだ限りのものは、みな他の国の学者に見られない一種独特の風格を具えていて、何か新鮮な感じを受けた。特に挿図や図版には何かしら著者の趣味のようなものを感じた。彼の追憶文を草した、彼の後継者 Johannes Kjensmo 博士は、Strøm 教授の魅力は、いつも物静かに控え目で、少

Kaare Strøm, 1956, in Helsinki (上野撮影)

しもけばけばしいところがなかったと書いている。そして、彼が自然科学以外に、美術や文芸に深い興味をもっていたとも言っている。筆者は Strøm 教授に 1956 年ヘルシンキで会ったのが最後であるが、そのときの印象は瀟洒な紳士という感じで、不便な土地でいくつもの大きい湖沼研究をなし遂げた人とは、思えぬ位であった。

1956 年 8 月、ヘルシンキからの帰途、筆者はオスロー郊外 Blindern のオスロー大学に Strøm 教授を訪問したが、帰郷中で会えなかった。自然科学ビルの三階の地理学教室の彼の研究室を助手 Elgmork 氏の案内で見物したのにとどまったのは残念であった。Strøm は 1948 年にオスロー大学の地理学の教授になっていたのであって、陸水学の教授に配置換えされたのは 1962 年のことである。彼は 1902 年 7 月 23 日の生まれであるから、その享年は満 65 歳である。彼の死はノルウェー陸水学の大きな損失であるばかりでなく、広く世界の陸水学界がこの特異な陸水学者を失ったのである。

(上野益三, Masuzo Uéno)

雑 報 (2)

日本陸水学会甲信越支部発足

日本陸水学会甲信越支部は、去る 6 月長野県下諏訪町で開催された日本陸水学会第 33 回大会の会期中(6 月 6 日)に、設立総会を開き、正式に発足した。支部長は小泉清明博士、支部事務所は長野県上田市常入 500 信州大学繊維学部 応用動物学教室内におかれる。

また第 1 回支部総会並びに第 1 回研究発表会が 12 月 15 日(日)に諏訪市諏訪教育会館において開かれた(雑報 1 参照)。

(桜井善雄報)